

【問題】 体を $K = \mathbb{Q}(\sqrt[4]{2})$ とおくと、以下の問いに答えよ。

- (1) K が \mathbb{Q} の Galois 拡大でない事を示せ。
- (2) K を含む \mathbb{Q} の Galois 拡大 L で最小のものを求めよ。
- (3) Galois 群 $\text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ が位数 8 の二面体群と同型である事を示せ。
- (4) L の部分体を全て求めよ。

(H29 千葉大学理学研究科 数学・情報)

【解答】 $i = \sqrt{-1}$ とする。

(1) $f(x) = x^4 - 2$ と置けば Eisenstein の既約性判定法より $f(x)$ は \mathbb{Q} 上既約であり、 $f(\sqrt[4]{2}) = 0$ だから $f(x)$ は $\sqrt[4]{2}$ の \mathbb{Q} 上の最小多項式である。 \mathbb{C} に於いて $f(x) = (x - \sqrt[4]{2})(x + \sqrt[4]{2})(x - i\sqrt[4]{2})(x + i\sqrt[4]{2})$ と分解されるが、 $\pm\sqrt[4]{2}i$ は K に含まれないから $f(x)$ は K で 1 次式の積に分解されない。 よって K は \mathbb{Q} の正規拡大ではなく、従って Galois 拡大ではない。

(2) $L = \mathbb{Q}(\sqrt[4]{2}, i)$ とすれば、(1) の計算より L は \mathbb{Q} 上の既約単多項式の $f(x)$ の最小分解体となり、従って L は \mathbb{Q} の Galois 拡大である。

(3) 位数 8 の 2 面体群 D_4 とは基本関係式 $s^2 = t^2 = (st)^4 = e$ を持つ 2 つの生成元 s, t により生成される位数 8 の群である事に注意する。

K と $\mathbb{Q}(x)/f(x)\mathbb{Q}(x)$ と \mathbb{Q} 上同型だから $[K : \mathbb{Q}] = \deg f(x) = 4$ 。 $L = K(i) = K + Ki$ より $[L : K] = 2$ 。 よって $|\text{Gal}(L/\mathbb{Q})| = [L : \mathbb{Q}] = [L : K][K : \mathbb{Q}] = 8$ となる。 $\text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ の元は $\sqrt[4]{2}, i$ の行き先により決定される事に注意し、 $\sigma, \tau \in \text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ をそれぞれ

$$\sigma(\sqrt[4]{2}) = i\sqrt[4]{2}, \quad \sigma(i) = i, \quad \tau(\sqrt[4]{2}) = \sqrt[4]{2}, \quad \sigma(i) = -i$$

によって定義する。 このとき

	id	σ	σ^2	σ^3	τ	$\sigma\tau$	$\sigma^2\tau$	$\sigma^3\tau$
$\sqrt[4]{2}$	$\sqrt[4]{2}$	$i\sqrt[4]{2}$	$-\sqrt[4]{2}$	$-i\sqrt[4]{2}$	$\sqrt[4]{2}$	$i\sqrt[4]{2}$	$-\sqrt[4]{2}$	$-i\sqrt[4]{2}$
i	i	i	i	i	$-i$	$-i$	$-i$	$-i$

だから $\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) = \{\sigma^i, \sigma^i\tau\}_{i=0,1,2,3}$ となる。

$$(\sigma\tau)^2(\sqrt[4]{2}) = \sigma\tau(i\sqrt[4]{2}) = (-i) \cdot i\sqrt[4]{2} = \sqrt[4]{2}, \quad (\sigma\tau)^2(i) = \sigma\tau(-i) = i, \quad \therefore (\sigma\tau)^2 = id,$$

及び $\tau^2 = id$, $(\sigma\tau \cdot \tau)^4 = \sigma^4 = id$ より、 $t \mapsto \tau$, $s \mapsto \sigma\tau$ によって D_4 から $\text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ への群の全射が導かれる。 共に位数 8 である事から、これは同型射となる。

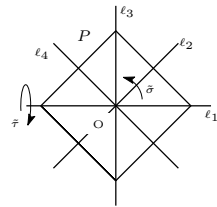
(4) 最初に 2 面体群 D_4 の部分群を決定する。 D_4 は右図の正方形 P を P に移す変換群であり、各元は次のような変換を表す：

- (i) $G_0 = \{id\}$, $G_1 = D_4$ とする。
- (ii) 原点 O を中心とする $\pi/2$ 回転を $\tilde{\sigma}$ 、直線 ℓ_1 に関する折り返しを $\tilde{\tau}$ とする。 D_4 は $\tilde{\sigma}, \tilde{\tau}$ により生成され、

$$\tilde{\sigma}^4 = id, \quad \tilde{\tau}^2 = id, \quad (\tilde{\tau}\tilde{\sigma})^2 = id$$

が成立。 従って $\tilde{\sigma} \mapsto \sigma$, $\tilde{\tau} \mapsto \tau$ という対応は D_4 から $\text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ への同型となる。

- (iii) $\tilde{\sigma}$ により生成される群 G_2 は位数 4 の部分群となる。
- (iii) $\tilde{\sigma}^2 (= \pi$ 回転) は位数 2 の元となる。 $\tilde{\sigma}^2$ で生成される群 G_3 は位数 2 の部分群となる。
- (iv) ℓ_2, ℓ_3, ℓ_4 に関する折り返しはそれぞれ $\tilde{\sigma}\tilde{\tau}$, $\tilde{\sigma}^2\tilde{\tau}$, $\tilde{\sigma}^3\tilde{\tau}$ により与えられる。 $\tilde{\tau}$, $\tilde{\sigma}\tilde{\tau}$, $\tilde{\sigma}^2\tilde{\tau}$, $\tilde{\sigma}^3\tilde{\tau}$ で生成される部分群をそれぞれ G_4, \dots, G_7 とすれば各 G_i は位数 2 の部分群となる。
- (v) 直線 ℓ_1, ℓ_3 に関する折り返しにより生成される部分群を $G_8 = \{id, \tilde{\tau}, \tilde{\sigma}^2\tilde{\tau}, \tilde{\sigma}^2\}$ とする。
- (vi) 直線 ℓ_2, ℓ_4 に関する折り返しにより生成される部分群を $G_9 = \{id, \tilde{\sigma}\tilde{\tau}, \tilde{\sigma}^3\tilde{\tau}, \tilde{\sigma}^2\}$ とする。



以上より D_4 の部分群は $G_0 \sim G_9$ の計 10 個である。 次に G_i に関する L の不変体を L_i を求める。 $L_0 = L$, $L_1 = \mathbb{Q}$ となる事は自明。 L の \mathbb{Q} 上の基底 $\{\sqrt[4]{2}^j, i\sqrt[4]{2}^j\}_{j=0,1,2,3}$ をとり、任意の $x \in L$ を

$$x = x_0 + x_1\sqrt[4]{2} + x_2\sqrt[4]{2^2} + x_3\sqrt[4]{2^3} + x_4i + x_5i\sqrt[4]{2} + x_6i\sqrt[4]{2^2} + x_7i\sqrt[4]{2^3}$$

と表す。

$$(i) \quad \sigma(x) = x_0 - x_5\sqrt[4]{2} - x_2\sqrt[4]{2^2} + x_7\sqrt[4]{2^3} + x_4i + x_1i\sqrt[4]{2} - x_6i\sqrt[4]{2^2} - x_3i\sqrt[4]{2^3} \text{ より}$$

$$\sigma(x) = x \iff x_1 = x_2 = x_3 = x_5 = x_6 = x_7 = 0, \iff x = x_0 + x_4i \quad \therefore L_2 = \mathbb{Q}(i)$$

(ii) $\sigma^2(x) = x_0 - x_1\sqrt[4]{2} + x_2\sqrt[4]{2^2} - x_3\sqrt[4]{2^3} + x_4i - x_5i\sqrt[4]{2} + x_6i\sqrt[4]{2^2} - x_7i\sqrt[4]{2^3}$ より

$$\sigma^2(x) = x \Leftrightarrow x_1 = x_3 = x_5 = x_7 = 0, \Leftrightarrow x = x_0 + x_2\sqrt[4]{2^2} + x_4i + x_6i\sqrt[4]{2^2}, \quad \therefore L_3 = \mathbb{Q}(i, \sqrt{2}).$$

(iii) $\tau(x) = x_0 + x_1\sqrt[4]{2} + x_2\sqrt[4]{2^2} + x_3\sqrt[4]{2^3} - x_4i - ix_5\sqrt[4]{2} - ix_6i\sqrt[4]{2^2} - ix_7\sqrt[4]{2^3}$ より

$$\tau(x) = x \Leftrightarrow x_4 = x_5 = x_6 = x_7 = 0, \Leftrightarrow x = x_0 + x_1\sqrt[4]{2} + x_2\sqrt[4]{2^2} + x_3\sqrt[4]{2^3}, \quad \therefore L_4 = \mathbb{Q}(\sqrt[4]{2}) = K.$$

(vi) $\sigma\tau(x) = x_0 + x_5\sqrt[4]{2} - x_2\sqrt[4]{2^2} - x_7\sqrt[4]{2^3} - x_4i + x_1i\sqrt[4]{2} + x_6i\sqrt[4]{2^2} - x_3i\sqrt[4]{2^3}$ より

$$\sigma\tau(x) = x \Leftrightarrow x_2 = 0, x_4 = 0, x_5 = x_1, x_7 = -x_3$$

$$\Leftrightarrow x = x_0 + x_1\frac{1+i}{\sqrt[4]{2}} + x_2\left(\frac{1+i}{\sqrt[4]{2}}\right)^2 + x_3\left(\frac{1+i}{\sqrt[4]{2}}\right)^3 \quad \therefore L_5 = \mathbb{Q}\left(\frac{1+i}{\sqrt[4]{2}}\right).$$

(v) $\sigma^2\tau(x) = x_0 - x_1\sqrt[4]{2} + x_2\sqrt[4]{2^2} - x_3\sqrt[4]{2^3} - x_4i + x_5i\sqrt[4]{2} - x_6i\sqrt[4]{2^2} + x_7i\sqrt[4]{2^3}$ より

$$\tau(x) = x \Leftrightarrow x_1 = x_3 = x_4 = x_6 = 0 \Leftrightarrow x = x_0 + x_2\sqrt[4]{2^2} + x_5i\sqrt[4]{2} + x_7i\sqrt[4]{2^3}, \quad \therefore L_6 = \mathbb{Q}(i\sqrt[4]{2}).$$

(vi) $\sigma^3\tau(x) = x_0 - x_5\sqrt[4]{2} - x_2\sqrt[4]{2^2} + x_7\sqrt[4]{2^3} - x_4i - x_1i\sqrt[4]{2} + x_6i\sqrt[4]{2^2} + x_3i\sqrt[4]{2^3}$ より

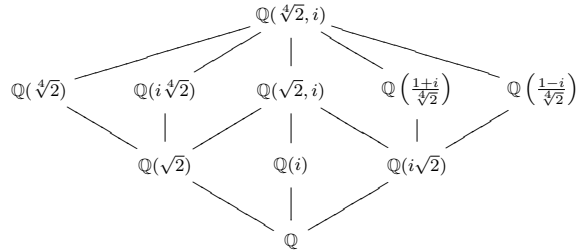
$$\tau(x) = x \Leftrightarrow x_2 = 0, x_4 = 0, x_5 = -x_1, x_7 = x_3$$

$$\Leftrightarrow x = x_0 + x_1\frac{1-i}{\sqrt[4]{2}} + x_2\left(\frac{1-i}{\sqrt[4]{2}}\right)^2 + x_3\left(\frac{1-i}{\sqrt[4]{2}}\right)^3 \quad \therefore L_7 = \mathbb{Q}\left(\frac{1-i}{\sqrt[4]{2}}\right).$$

(vii) $L_8 = L_4 \cap L_6$ より $L_8 = \mathbb{Q}(\sqrt{2})$.

(viii) $L_9 = L_5 \cap L_7$ より $L_9 = \mathbb{Q}(i\sqrt{2})$.

以上より L の部分体 (= 拡大 L/\mathbb{Q} の中間体) は次の図の通り :



□

- 【問題】 (1) 環 $\mathbb{Z}[X]/(X^2 - 1)$ は整域ではなく、環 $\mathbb{Z}[X]/(X^2 + 1)$ は整域であることを示せ。
 (2) p を奇素数とすると、環 $\mathbb{Z}[X]$ のイデアルとして

$$(X^{p^2-1} - 1) \subset (X^2 + 1)$$

であることを示せ。

- (3) p を奇素数とし、自然な準同型

$$\mathbb{Z}[X] \rightarrow \mathbb{Z}[X]/(p, X^2 + 1)$$

における $n \in \mathbb{Z}, X$ の像をそれぞれ \bar{n}, \bar{X} と書く。このとき任意の $a, b \in \mathbb{Z}$ に対して

$$(\bar{a}\bar{X} + \bar{b})^p = \bar{a}\bar{X} + \bar{b}$$

が成立するための p の条件を求めよ。

- (4) 環 $\mathbb{Z}[X]/(p, X^2 + 1)$ が整域であるための奇素数 p の条件を求めよ。

(H24 千葉大学理学研究科 数学専攻)

【解答】 (1) $\mathbb{Z}[X]$ から $\mathbb{Z}[X]/(X^2 \pm 1)$ への標準的射影を π_{\pm} と記す。 $\mathbb{Z}[X]/(X^2 - 1)$ に於いて $\pi_-(X - 1), \pi_-(X + 1) \neq 0$, かつ $\pi_-(X - 1)\pi_-(X + 1) = \pi_-(X^2 - 1) = 0$ となるから $\mathbb{Z}[X]/(X^2 - 1)$ は整域ではない。

一方, $f(X), g(X) \in \mathbb{Z}[X]$ に対し $f(X)g(X) \in (X^2 + 1), f(X) \notin (X^2 + 1)$ だとする。今,

$$f(X) = f_1(X)(X^2 + 1) + f_2(X), \quad g(X) = g_1(X)(X^2 + 1) + g_2(X)$$

$$(f_1(X), f_2(X), g_1(X), g_2(X) \in \mathbb{Z}[X], f_2(X) = a_0 + a_1X, g_2(X) = b_0 + b_1X, a_0, a_1, b_0, b_1 \in \mathbb{Z})$$

と表す。このとき $f_2(X)g_2(X) \in (X^2 + 1)$ であり, $f_2(X)g_2(X) = a_1b_1X^2 + (a_0b_1 + a_1b_0)X + a_0b_0$ だから $a_0b_1 + a_1b_0 = 0, a_1b_1 = a_0b_0$ 。特に

$$a_1(a_0b_1 + a_1b_0) = (a_0^2 + a_1^2)b_0 = 0 \quad a_0(a_0b_1 + a_1b_0) = (a_0^2 + a_1^2)b_1 = 0$$

が成立。 $f(X) \notin (X^2 + 1)$ より $f_2(X) \neq 0$, 従って $a_0^2 + a_1^2 \neq 0$ だから $b_0 = b_1 = 0$, 即ち $g(X) \in (X^2 + 1)$ となる。故に $(X^2 + 1)$ は素イデアル, よって $\mathbb{Z}[X]/(X^2 + 1)$ は整域である。

- (2) p は奇素数だから, $p = 2\ell + 1$ ($\ell \in \mathbb{Z}$) と表される。 $m = \frac{\ell(\ell+1)}{2}$ と置くと

$$X^{p^2-1} - 1 = X^{4\ell(\ell+1)} - 1 = (X^8)^m - 1 = (X^8 - 1)\{(X^8)^{m-1} + (X^8)^{m-2} + \dots + X^8 + 1\}$$

となる。 $X^8 - 1 = (X^4 + 1)(X^4 - 1)$ だから $(X^{p^2-1} - 1) \subset (X^2 + 1)$ となる。

- (3) 一般に任意の $a, b \in \mathbb{Z}$ に対し $(\bar{a}\bar{X} + \bar{b})^p = \bar{a}\bar{X}^p + \bar{b}$ が成立。従って

$$(\bar{a}\bar{X} + \bar{b})^p = \bar{a}\bar{X} + \bar{b} \quad (\forall a, b \in \mathbb{Z}) \Leftrightarrow \bar{X}^p - \bar{X} = \bar{0}$$

となる。 $p = 2m + 1$ ($m \in \mathbb{Z}_{>0}$) と置くと、左辺の両辺に \bar{X} を掛ければ

$$\bar{X}^{2m+1} - \bar{X} = \bar{0} \Leftrightarrow \bar{X}^{2m} - 1 = (-\bar{1})^m - \bar{1} = \bar{0} \Leftrightarrow m \in 2\mathbb{Z}$$

従って等式が成立するための条件は $p \in 4\mathbb{Z} + 1$ である。

- (4) $A = \mathbb{Z}[X]/(p, X^2 + 1) = \mathbb{F}_p[X]/\mathbb{F}_p[X](X^2 + 1)$ ($\mathbb{F}_p = \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$) と置く。このとき A が整域である事と $X^2 + 1$ が \mathbb{F}_p 上既約である事は同値である。

$X^2 + 1$ が既約でないとする。 $X^2 + 1 = (X - a)(X - b)$ となる $a, b \in \mathbb{F}_p$ が存在する。 $(X - a)(X - b) = X^2 - (a + b)X + ab$ より $b = -a, ab = -a^2 = 1$ だから, $a^2 + 1 = 0$ を満たす。逆に $a^2 + 1 = 0$ となる $a \in \mathbb{F}_p$ が存在すれば $X^2 + 1 = (X + a)(X - a)$ だから, $X^2 + 1$ が既約である事と $a^2 + 1 = 0$ となる $a \in \mathbb{F}_p$ が存在しない事は同値となる。

今, $p - 1$ と素な整数を代表とする $r \in \mathbb{F}_p$ を固定するとき, $\mathbb{F}_p^{\times} = \{r, r^2, \dots, r^{p-1}\}$ ($r^{p-1} = 1$) が成立する。 $r^m = -1$ ならば $r^{2m} = 1 = r^{p-1}$ だから $r^{\frac{p-1}{2}} = -1$ となる。このとき

$$a^2 + 1 = 0 \text{ となる } a \in \mathbb{F}_p \text{ が存在} \Leftrightarrow r^{2\ell} = r^{\frac{p-1}{2}} \text{ となる } \ell \text{ が存在}$$

従って $X^2 + 1$ が \mathbb{F}_p 上既約である事と $p \notin 4\mathbb{Z} + 1$ が同値となる。 p は奇素数だから A が整域である為の条件は $p \in 4\mathbb{Z} + 3$ である。 \square

【問題】 k を体, $A = k[X, Y, Z]/(X - Y^2 - Z^3)$ とする.

- (1) (Y, Z) が A の極大イデアルであることを示せ.
- (2) (X) が A の素イデアルであることを示せ.
- (3) $(X - Y^2)$ が A の素イデアルではないことを示せ.

(H17 千葉大学理学研究科 数学専攻)

【解答】 $x = X + (X - Y^2 - Z^3)$, $y = Y + (X - Y^2 - Z^3)$, $z = Z + (X - Y^2 - Z^3)$ と置く. $x = X + (X - Y^2 - Z^3) = Y^2 + Z^3 + (X - Y^2 - Z^3) = y^2 + z^3$ と表されるから, A の任意の元は y, z の多項式として表される. $f(Y, Z) = \sum_{i, j \geq 0} a_{ij} Y^i Z^j$ ($a_{ij} \in k$) に対し $f(Y, Z) \in (X - Y^2 - Z^3)A$ だとすると $f(Y, Z) = (X - Y^2 - Z^3)g(X, Y, Z)$ ($g(X, Y, Z) \in k[X, Y, Z]$) と表される. $g(X, Y, Z) = \sum_{i=0}^n g_i(Y, Z)X^i$ とするとき

$$f(Y, Z) = g_n(Y, Z)X^{n+1} + \sum_{i=1}^n (g_{i-1}(Y, Z) - (Y^2 + Z^3)g_i(Y, Z))X^i - (Y^2 + Z^3)g_0(Y, Z)$$

となるから, X^i の係数を比較すれば

$$g_n(Y, Z) = 0, \quad g_{i-1}(Y, Z) = (Y^2 + Z^3)g_i(Y, Z) \quad (i = 1, \dots, n), \quad f(Y, Z) = -(Y^2 + Z^3)g_0(Y, Z)$$

より $f(Y, Z) = 0$ となる. 従って $k[Y, Z] \ni f(Y, Z) \mapsto f(y, z) \in A$ は同型となる.

(1) $\varphi: A \rightarrow k$, $\varphi_1(f) = a_{00}$ ($f = \sum_{i, j \geq 0} a_{ij} y^i z^j \in A$ ($a_{ij} \in k$)) とすれば φ は全射であり, $yA + zA \subset \text{Ker } \varphi$ が成立. 一方, $f \in \text{Ker } \varphi$ だとすると

$$f = y \sum_{i > 0} a_{i0} y^{i-1} + z \sum_{i \geq 0, j > 0} a_{ij} y^i z^{j-1} \in yA + zA$$

だから $\text{Ker } \varphi \subset yA + zA$. 従って $A/(yA + zA) \simeq k$, 即ち $yA + zA$ は A の極大 ideal となる.

(2) $y^{2i} + (y^2 + z^3)A = (-z^3)^i + (y^2 + z^3)A$ より一般の $f(y, z) \in A$ に対し $f(y, z) - f_0(z) - f_1(z)y \in (y^2 + z^3)A$ となる $f_0(z), f_1(z)$ が存在する. $f(y, z) \in (y^2 + z^3)A$ だとすると A に於いて $f_0(z) + f_1(z)y = (y^2 + z^3)g(y, z)$ と表される. $g(y, z) = \sum_{i=0}^n g_i(z)y^i$ とするとき

$$f_0(z) + f_1(z)y = z^3 g_0(z) + z^3 g_1(z)y + \sum_{i=2}^n (g_{i-2}(z) + z^3 g_i(z))y^i + g_{n-1}(z)y^{n+1} + g_n(z)y^{n+2}$$

より $g_n(z) = g_{n-1}(z) = 0$, $g_{i-2}(z) = -z^3 g_i$ ($i = 2, \dots, n$) となり, 従って $f_0(z) = z^3 g_0(z) = 0$, $f_1(z) = z^3 g_1(z) = 0$ となる.

今, $f(z) = f_0(z) + f_1(z)y$, $g(z) = g_0(z) + g_1(z)y \in A$ に対し

$$\begin{aligned} f(z)g(z) + (y^2 + z^3)A &= f_0(z)g_0(z) + f_1(z)g_0(z)y + f_0(z)g_1(z)y + f_1(z)g_1(z)y^2 + (y^2 + z^3)A \\ &= f_0(z)g_0(z) - f_1(z)g_1(z)z^3 + (f_1(z)g_0(z) + f_0(z)g_1(z))y + (y^2 + z^3)A \end{aligned}$$

より, $f(z)g(z) \in (y^2 + z^3)A$ ならば $f_0(z)g_0(z) - f_1(z)g_1(z)z^3 = f_1(z)g_0(z) + f_0(z)g_1(z) = 0$ となる.

$$f_0(z)(f_0(z)g_0(z) - z^3 f_1(z)g_1(z)) = f_0(z)^2 g_0(z) + z^3 f_1(z)^2 g_0(z) = (f_0(z)^2 + z^3 f_1(z)^2)g_0(z) = 0$$

$$f_1(z)(f_0(z)g_0(z) - z^3 f_1(z)g_1(z)) = -f_0(z)^2 g_1(z) - z^3 f_1(z)^2 g_1(z) = -(f_0(z)^2 + z^3 f_1(z)^2)g_1(z) = 0$$

より $g(z) \neq 0$ ならば $f_0(z)^2 = -z^3 f_1(z)^2$ となり, この等式の次数を比較すれば $f_0(z) = f_1(z) = 0$ となる. よって $f(z)g(z) \in (y^2 + z^3)A$, $g(z) \notin (y^2 + z^3)A$ ならば $f(z) \in (y^2 + z^3)A$ となるから, $(y^2 + z^3)A$ は素イデアルである.

(3) $(x - y^2)A = z^3 A$ である事に注意する. 一般の $f(y, z) \in A$ に対し $f(y, z) - f_0(y) - f_1(y)z - f_2(y)z^2 \in z^3 A$ となる $f_0(y), f_1(y), f_2(y)$ が存在する. $f(y, z) \in z^3 A$ だとすると A に於いて $f_0(y) + f_1(y)z + f_2(y)z^2 = z^3 g(y, z)$ と表されるが, 両辺の z に関する次数を比較すれば $f_0(z) = f_1(z) = f_2(z) = 0$ となる. ここで $f(y, z) = z$, $g(y, z) = z^2$ とすれば $f(y, z), g(y, z) \notin z^3 A$ だが, $f(y, z)g(y, z) \in z^3 A$ となるから $(x - y^2)A$ は素イデアルではない. \square

【問題】 実数体 \mathbb{R} 上の 2 次行列環 $M_2(\mathbb{R})$ の部分集合 A を以下で定める.

$$A = \left\{ \begin{pmatrix} r & s \\ 0 & r \end{pmatrix} \mid r, s \in \mathbb{R} \right\}$$

以下の間に答えよ.

- (1) A は $M_2(\mathbb{R})$ の部分環であることを証明せよ.
 (2) \mathbb{R} 上 1 変数多項式環 $\mathbb{R}[X]$ から A への写像 ϕ を以下で定める.

$$\phi: \mathbb{R}[X] \rightarrow A, \quad r_0 + r_1X + \cdots + r_nX^n \mapsto \begin{pmatrix} r_0 & r_1 \\ 0 & r_0 \end{pmatrix}$$

$r_i \in \mathbb{R}$. このとき ϕ は環の準同型かつ全射であることを証明せよ.

- (3) (2) での ϕ に対して, $\text{Ker } \phi = (X^2)$ であることを証明せよ.
 (4) A のイデアルをすべて求めよ.

(H16 千葉大学理学研究科 数学専攻)

【解答】 (1) $B_i = \begin{pmatrix} r_i & s_i \\ 0 & r_i \end{pmatrix} \in A$ ($i = 1, 2$) に対し

$$B_1 \pm B_2 = \begin{pmatrix} r_1 \pm r_2 & s_1 \pm s_2 \\ 0 & r_1 \pm r_2 \end{pmatrix}, \quad B_1 B_2 = \begin{pmatrix} r_1 r_2 & r_1 s_2 + s_1 r_2 \\ 0 & r_1 r_2 \end{pmatrix} \in A$$

であり, さらに $E_2 \in A$ (E_2 は 2 次単位行列) となるから, A は $M_2(\mathbb{R})$ の部分環である.

- (2) $f_i = r_{i0} + r_{i1}X + \cdots + r_{in}X^n \in \mathbb{R}[X]$ ($i = 1, 2$) とする. 加法について

$$\begin{aligned} \phi(f_1 + f_2) &= \phi\left(\sum_{j=0}^n (r_{1j} + r_{2j})X^j\right) = \begin{pmatrix} r_{10} + r_{20} & r_{11} + r_{21} \\ 0 & r_{10} + r_{20} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} r_{10} & r_{11} \\ 0 & r_{10} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} r_{20} & r_{21} \\ 0 & r_{20} \end{pmatrix} = \phi\left(\sum_{j=0}^n r_{1j}X^j\right) + \phi\left(\sum_{j=0}^n r_{2j}X^j\right) \end{aligned}$$

より $\phi(f_1 + f_2) = \phi(f_1) + \phi(f_2)$. 一方, 積について

$$f_1 f_2 = \left(\sum_{j=0}^n r_{1j}X^j\right) \left(\sum_{\ell=0}^n r_{2\ell}X^\ell\right) = \sum_{j,\ell=0}^n (r_{1j}r_{2\ell})X^{j+\ell} = r_{10}r_{20} + (r_{10}r_{21} + r_{11}r_{20})X + \sum_{i=2}^{2n} \sum_{j+\ell=i} (r_{1j}r_{2\ell})X^i$$

だから,

$$\phi(f_1 f_2) = \begin{pmatrix} r_{10}r_{20} & r_{10}r_{21} + r_{11}r_{20} \\ 0 & r_{10}r_{20} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} r_{10} & r_{11} \\ 0 & r_{10} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r_{20} & r_{21} \\ 0 & r_{20} \end{pmatrix} = \phi\left(\sum_{j=0}^n r_{1j}X^j\right) \phi\left(\sum_{j=0}^n r_{2j}X^j\right)$$

より $\phi(f_1 f_2) = \phi(f_1)\phi(f_2)$ となる. また $\phi(1) = E_2$ である事が容易に分かる. 以上より ϕ は $\mathbb{R}[X]$ から A への (単位元を単位元に写す) 環の準同型である事が確かめられた.

- (3) $f = r_0 + r_1X + \cdots + r_nX^n \in \mathbb{R}[X]$ に対し

$$\phi(f) = \begin{pmatrix} r_0 & r_1 \\ 0 & r_0 \end{pmatrix} = O \Leftrightarrow r_0 = r_1 = 0 \Leftrightarrow f \in (X^2)$$

だから, $\text{Ker } \phi = (X^2)$.

(4) (2)(3), 及び準同型定理より A は単位的環として $\mathbb{R}[X]/(X^2)$ と同型となる. $\mathbb{R}[X]/(X^2)$ のイデアルは $\mathbb{R}[X]$ の (X^2) を含む (単項) イデアル (f) ($f \in \mathbb{R}[X]$ は単多項式) によって $(f)/(X^2)$ と表される. このとき $f \mid X^2$ より f は $1, X, X^2$, 従って $\mathbb{R}[X]/(X^2)$ のイデアルは $\mathbb{R}[X]/(X^2)$, $(X)/(X^2)$, 0 の何れかとなる. この結果を A に還元すれば, A のイデアルは以下の 3 種類である:

$$A, \quad \left\{ \begin{pmatrix} 0 & s \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \mid s \in \mathbb{R} \right\}, \quad O.$$

□

【問題】 R は可換環で L, M は R 加群とし, L から M への R 準同型写像からなる R 加群を $\text{Hom}_R(L, M)$ で表す. $a \in R$ は M 上の非零因子 ($0 \neq x$ ならば $ax \neq 0$) とする.

- (1) a は $\text{Hom}_R(L, M)$ 上の非零因子でもあることを示せ.
- (2) さらに $b \in R$ は剰余加群 M/aM 上の非零因子とせよ. 但し $aM = \{ax \mid x \in M\}$ である. $N = \text{Hom}_R(L, M)$ とおくと b は N/aN 上の非零因子でもあることを示せ.

(H15 千葉大学理学研究科 数学専攻)

【解答】 (1) $af = 0$ だとする. このとき任意の $x \in L$ に対し $af(x) = 0$ となる. a は M の非零因子だから $f(x) = 0$, 従って $f = 0$ となる. 故に a は $\text{Hom}_R(L, M)$ の非零因子である.

(2) $f \in N$ に対し $bf \in aN$, 即ち $bf = ag$ となる $g \in N$ が存在したとする. このとき任意の $x \in L$ に対し $bf(x) = ag(x) \in aM$ となるから, b が M/aM の非零因子であることより $f(x) \in aM$, 即ち, $f(x) = ah(x)$ ($h(x) \in M$) と表される. a は非零因子だから, $h(x)$ は $f(x)$ に対し一意に決まる. ここで $x, y \in L, r, s \in R$ とすると

$$ah(rx + sy) = f(rx + sy) = rf(x) + sf(y) = rah(x) + sah(y) = a(rh(x) + sh(y))$$

より $h(rx + sy) = rh(x) + sh(y)$, 従って $h \in N$ となる. これより $bf \in aN$ ならば $f = ah \in aN$ となる事から, b は N/aN 上の非零因子となる. □